



ゲービーと



コーム

Kevin Spring

山の麓にある森のあなぐらに、あなぐまのクームと、でばねずみのゲービーが住んでいました。冬になってからは二匹ともすみかから一步も出ずに死んだように眠っていましたので、隣同士なのにお互いのことを全く知らずにいました。

「ぼ〜くは〜とおてえいむおお〜」

ある日、あなぐまのクームはなんだかよく分からない音で目を覚ましました。

「こわい夢を見たのかな」

クームはまだ眠い目をこすりながらつぶやきました。そしてまたすぐに目を閉じました。変な音はもう聞こえてこなかったので少しホッとしました。ところが…、

「なんてえ〜す〜てきい〜な…ぼくのお〜」

クームは、この調子の外れた歌声ですっかり目を覚ましました。

「なんて、へたくそなんだろう」

クームはそう口に出さずにはいられませんでした。歌声は止むどころかどんどん勢いがついてきて、クームはだんだんイライラしてくるのです。クームは、あなぐらから出て辺りを見渡しました。『僕とおんなじふうにいるいきものはいないのかな？』うろうろとしますが、春には少し早かったようで、誰もいません。空気もまだひんやりとしています。『もう少し眠ろう』クームは自分のあなぐらに戻りました。

でばねずみのゲービーは、クームの隣のあなぐらで暮らしているのですが、隣のあなぐらに誰かがいるなんて考えてもみませんでした。それは、周りがとても静かだからかもしれませんし、他の誰かがいてもいなくても、ただ関心がないからなのかもしれません。

毎日毎日、ゲービーは歌いました。大きな声でひとりごとを言ったりもしていました。一方、あなぐらの中で静かに過ごすことが好きなクームは、隣の音がわずらわしくてたまらなくなっていました。『もう、我慢できないぞ』と、隣のあなぐらに文句を言いに行こうと決意しました。クームがあなぐらに入ろうとしたそのとき、

「はー！はー！はー！はー！はははは、はへひふへほはほ…」

奇妙な声が響き渡りました。クームはぶるりと震えがきました。『待てよ、奴は僕よりずっと大きくて…食われてしまうかもしれない』クームは思い直して、やっぱりまた我慢することにしました。

実はゲービーには困っていることがありました。年中しゃべったり歌ったりしていないと、歯が伸びてしまうのです。ちょっとくらいならいいでしょう、でもゲービーの場合は前歯が地面に突き刺さってしまうことなんて、よくあることなのです。黙ってさえいれば、すぐです。

結構がんばったのですが、ついにクームは限界だと感じて、隣の住民に手紙を書くことにしました。相手を怒らせないように、そしてクームの気持ちをきちんと伝えるための手紙です。クー

ムは頭の中で何度も手紙を書き直しました。

『あなたの声はとてもうるさいです。とても迷惑なので静かにして下さい』

『静かにしろ。さもないと大変な目にあうぞ』

『ぼくは、あなたの隣の穴に住むクームといいます。毎日あなたの声を聞いています。とてもうるさいです。もう少し静かにしてもらえないでしょうか』

いまいちです。そこでクームは考えつきました。

「そうだ、知り合いになろう」

ゲービーは食糧調達から戻って自分のあなぐらに入ると見覚えのない樹の皮が地面に置いてあるのに気が付きました。

「ん？なんだろうこれは。食べられるのかな？」

ゲービーは薄っぺらい樹皮をぺらりとひっくり返しました。

「おお？何か書いてあるぞ。なにに？親愛なるであろう、お隣さんへ。僕のことかな？えーと、僕はあなたの家の隣のあなぐらに住んでいるクームといいます」

ゲービーは、続きを黙って読みました。『せっかく隣に住んでいるんですから、あなたのことを知りたいんです。お返事待っています。クーム』ゲービーは、お返事待っています。クームというところが気に入って、お返事待っていますクームの歌を歌いだしそうになるのをぐっとこらえるのでした。『歯がむずがゆいなあ。僕のことを知りたいって一体何を書けばいいんだろう』ゲービーは、カリカリきゅーきゅー口に出して言ってみました。

「僕の名前はゲービー。昆虫と硬い木の実が大好きなんだ。今度きみのために歌ってあげるよ。よし、これでよし。えへんえへん」

クームがくれた樹皮の裏っかわに、ゲービーは返事を書いて、隣のあなぐらに入れました。

クームは返事が来たことをたいそううれしく感じました。きみのために歌ってあげるよ、のところは、ぶるりと毛が逆立ちしましたが、大好きがくま肉じゃなくてよかったと、ひとまず胸をなでおろしたのです。

『ゲービーくんかあ。どんな姿をしているんだろう』クームは想像しました。

『クームくんのために歌うにはクームくんがどんな風だか知らなくちゃ』ゲービーは、カリカリきゅーきゅーつぶやきました。

1・2・3。そうだ。4・5・6。隣にいるんだから、会いに行こう。7・8・9・10！

クームとゲービーは、ほとんど同時にあなぐらから顔を出し互いを認識したのです。でも、どうでしょう、ゲービーもクームも目を合わせたかと思うと、また一斉に頭を引っ込めてしまったのです。そしてまた、おそるおそる、頭を穴から出しました。おそるおそるも、ほとんど同時でした。すぐにあいさつして、お話でもすればいいじゃないと思うのですが、ゲービーもクームも気軽に声をかけることができませんでした。二匹ともとてもはずかしがり屋だったのです。

ゲービーの姿を一目見たクームは、ゲービーの長い前歯が愛らしく映って、歌が迷惑だなんてますます言えなくなってしまいました。ゲービーの方はというとカッチョいいハナをしたクームが友達になると思うとうれしくて、もう、今すぐにでも歌いだしたい気分でした。ゲービーは自分のあなぐらに戻って声を震わせます。

「なんてえいーすてきなーぼくのーとも…ともだっちい〜」

興奮のあまり声が裏返りますがおかまいなしです。歌声はもちろんクームのあなぐらにも聞こえ

てきていました。クームは、思わず笑ってしまって、こう語りかけました。

「ねえねえ、ゲービーくん。歌っているときはどんな気持ちなんだい？」

「…え？どんな気持ち？う～ん」

ゲービーは、クームの質問に答える代わりにカリカリきゅーきゅーひとりごとを言い始めました。クームには聞こえないくらいの小さい声だったので、返事を聞く前にクームは眠ってしまいました。

翌朝クームは歌声で目を覚ましました。ゲービーの歌声です。朝にしては少し早かったのでクームは思いました。『なんて勝手な、わがままなゲービーなんだ！』昨晚クームの問いかけにいつまでたっても答えなかったことも思い出してますます腹を立ててしまいました。

「へたくそ！もう、きみとは絶交だ！」

クームはゲービーのあなぐらの入口まで行ってあなぐらに向って思いきりそう叫んでいました。まだ正式に、友達になる前なのに。

クームは今まで言えなかった一言を思いきり叫んだので、すっきりしました。吐き出した分、大きく息を吸い込んで自分のあなぐらに戻りました。ですが、あなぐらに戻ると徐々に、『ああ、僕はなんてひどいことをやってしまったんだろう』と思うようになりました。それを追いかけるように、『僕は正しいことを言ったまでだ』という考えが頭に浮かび、クームの心と頭は大忙しになりました。隣のあなぐらからゲービーの歌声も聞こえてきません。『泣いているんだろうか、怒っているんだろうか』と、ゲービーの反応が気になって仕方ありませんでしたが、会いに行く勇気もありません。やがてクームは自分を責めるようになり、じっとしてられなくなって、手当たりしだいならぬ鼻当たりしだいに穴を掘りました。あまりに夢中で掘っていたものからです、途中で懐かしい友達に

「やあ、クームじゃないか」

と声をかけられても生返事してまたすぐに穴を掘るのでした。

丸一日掘り続けたクームは、さすがに疲れて頭がぼーっとしてきていました。『やれやれ、ずいぶん遠くまで来てしまったなあ。これはまずい。ぼくのあなぐらはどこだったかなあ…』クームは穴を掘るのをびたりとやめました。

土の壁を目の前にしてクームは、座り込んでしまいました。『戻らなくちゃ。あああ～、おなか、すいたなあ。でも僕はくたびれちゃって歩けそうにないな』そう思っているとクームの耳に、

「うっくっくっく」

という音が聞こえてきました。クームはその音を聞いて、『僕の体の音かな』と思いました。クームは自分のおなかに手を当ててみました。

「ぐーぎゅるぎゅー」

というさっきのとはまるで違う音が鳴り、クームは自分がいかにハラペコかを再確認しました。思わずため息がでます。

「うっくっくっく」

またです。クームは目の前の土壁に耳をぴったりくっつけました。

「うっくっくっくう」

泣いているようにも笑っているようにも聞こえます。

「どうかしましたか？大丈夫ですか？」

クームは壁の向こう側にむかって穏やかに問いかけました。すこし間があってから

「う～うう…うえーん」

と聞こえてきましたので、

「泣いているんだね？どうしたの？」

そう言って、クームは目の前の壁を掘りだしました。すると、そう長い間掘らないでもすぐに、空間に出ました。

そのときクームが目にしたのは白い滑り台でした。でも、確かに泣き声の主は、ここにいるはずなのです。『おかしいなあ、ものが泣くのなんて聞いたことがないよう』クームはハナをぼりぼりとかき、

「誰かいるんですかぁ？それとも滑り台さんですか？」

と、空間に向かって尋ねました。すると、

「ううう、うえ～うう」

という声と共に滑り台が動いたんです。クームは、滑り台が、滑る台ではなくって、歯、だということにやっと気が付きました。

「ゲ、ゲービーだね！いったいどうしたっていうんだい」

クームは、滑り台改めゲービーに駆け寄りしゃべりやすいように、歯を支えてやりました。

「僕の歯は、のびちゃうんだあ」

「うんうん、知っているよ、げっ歯目だからね、ゲービーくんは」

ゲービーはなんだか元気がないようです。目にはうっすらと涙が浮かんでいるようにも見えます。クームは突然、自分がゲービーに言った言葉を思い出して、ハッとしました。

「ゲービーくん、今朝は…ごめんなさい」

「…ううん。…いいんだ」

「…で、この、この、のびちゃった歯はどうするの？折るの？とぐの？僕はどうすればいい？」

クームはそう言いながらも、痛いんじゃないかと不安に思っていました。

「僕もわかんないよう。だって、こんなに伸びてしまったのは初めてなんだもんなあ。いつもは伸びたって堅い実を食べればへっちゃらだったんだ」

ゲービーは、もそもそと震える声で言うのでした。

「楽しいときはいいんだけど、悲しいときは悲しくなっちゃうんだなあ」

ゲービーにしてみればとても当たり前のことを言ったまでなのですが、クームはなにか感じるものがあつたようです。

「な…なんてえ…」

「…？」

「なんてー、すてきっなあー、ぼくのー、ともだっちいー」

クームはちょっと恥ずかしそうに歌って、ハナをぼりぼりかきました。

「へたっぴーだなあ、クームは」

「ゲービーだって、へたっぴいーだよ」

思わずあっさりと、クームはそう、言いました。言ってから、アッっという顔をして、二匹は目を合わせて笑い合いました。

ゲービーとクームの二匹は、本当の友達になったのです。めでたし。と、なればそれはそれでいいのですが…。そういうわけにはいきません。だって、伸びに伸びたゲービーの歯の処理問題が残されていますから。のこぎりは音がすごくてだめでしたし、手で折るには丈夫すぎました。クームはあちこちから硬い実を運んでは、ゲービーに割らせました。ほんのちょっとずつしか歯は欠けなかったのですが、クームは気が遠くなってしまいました。見かねたゲービーは言いました。

「クームウ〜、もういいよー、僕は大丈夫だよ。歯をね、しゃべったりしながら動かしていれば、もう伸びないからね。えっへん」

けれども、気が遠くなったクームの頭にはぜんぜん違うことが浮かんでいました。

「げっ歯王に会って来る」

クームはどこかを見ながらそう言いました。

「げっ歯王？誰だいそれは？」

ぼうっとした目でクームはつぶやきました。

「歯には歯を」

ゲービーにはクームの言っていることがさっぱり分からず、ただただ歯を動かしているのでした。

ゲービーはげっ歯の王、というだけでひどくおびえました。

「ぼ、僕は、ぶ、ぶうつぶつぶんと言いながら、えへっ、おうちで待っているからさ。でもクームは、怖くはないのかい？」

クームはさっきから、機械じかけになったみたいに心ここにあらずの様子です。目がつり上がってさんかくになっているような気がします。

「聞いているのかいクーム？」

とそのときです、クームはまるで誰かがクームスイッチのボタンを押したみたいに、どこかへ行ってしまいました。

一匹とり残されてしまったゲービーは急に心細くなりました。ふと何か恐ろしいことを考えそうになったので、ぶるんと頭を揺すってこう言いました。

「よおっし、げっ歯王の歌を歌うんだもん」

ゲービーは、思いつくまま、とにかく歌いました。

ふんふんふんげっ歯のお一王様あ…お、王女、王子、とかあごかぞくのお一みなさまあ〜。こんにちは一は一あ。王は一匹なのですかー？僕はかぞくとお一離れてえ暮らしているんです。えーと。王の歯は、歯は…。どうかあ一僕の友達をかじらないでっへえーちょうだいね〜らららあ…。

「たーっタッタッタター」

気が付くと、クームの目の前には小さな体のげっ歯のおやじがいました。『このおじさんは誰だ

ろう…。はっ。僕はここで何をしているんだろう？』クームは前足で目をこすりました。

「たったったあー」

「あ、あなたは、どちら様ですか？」

「あんちゃん。たったった、それはないだろうがよう」

「は、はあ…」

「きみが呼んだから出て来たんだよ、ハナぐまくん」

「あなぐまです」

クームはそんなふうによく間違われるので、うんざりした様子で訂正しました。

「しっけい。ところであなぐまくん、僕に何の用お？」

ぶおん、と頭の中で音をたてて、クームは今日の出来事を思い出しました。

「あ——っ！そうだ。げっ歯王！大変なんです、僕の友達が、げっ歯のゲービーが…」

「げっしのゲービー？」

「はい。あなたのお仲間かと、存じます」

「あ、きみ、クーム？」

「え？どうして？僕の名前を？」

「うむ。さっき歌っていたからね、ゲービーとやらが。きみをかじらないでちょうだいでって」
そう言ってげっ歯王はいたずらっぽく前歯を突き出して目をひんむいてみせました。ですがクームは、ゲービーの歯のことで頭がいっぱいで、そんなのも目に入りませんでした。

「僕、げっ歯王はきっとすごい歯をしているんだと思ったから、ゲービーの歯をかじってもらおうって思ったんです。でも…」

「それは無理だな。だって歯はうまくないもん」

「うまければいいですか？」

「そうだね」

クームはゲービーの歯にあまい汁をたっぷり塗ろうかと考えました。

「あのね、でも表になにか塗るのはだめだよ」

「どうしよう…」

クームは思いました。『このげっ歯王は、魔法なんかが使えるのかな？僕が何かする代わりに、ゲービーを助けてくれたりはしないだろうか…』

「あのねえ、僕は魔法使えないよ。きみが何を考えているかくらいは、分かるけどね」

「じゃあ、どうすればいいんですか？」

「のびすぎた歯は自然に抜けるか折れるかするから大丈夫だよ。若者はね色々あるから。よくあることだ」

「え？」

「それは我らがげっ歯目の定め、というわけさ。きみが穴を掘りまくるのと一緒にだよ。覚えといて。たーったったったーたー…」

げっ歯王は、笑いながら暗闇へ去って行きました。クームは、ほっとして力が抜けてしまいました。

「さあ、帰らなくちゃ」

ゲービーの歌声が聞こえてきました。もうすぐです。

「ゲービー、ただいま、あのねー」

クームは歯のことについてげっ歯王に聞いたことを伝えました。

「ふ～ん。じゃあ、しゃべらなくても、歌わなくてもいいのかな？…でも歌ってもいいのかなあ。あれ？僕は歯が伸びるから歌っていたんだっけ、歌うから歯が伸びてきたんだっけ？あれれ？こんぐらがっちゃった」

『歌うから伸びるんだよ、歌わなければそんなに伸びないから歌うのをやめればいいんだよって言えばゲービーのへたくそな歌を聞かなくてすむかもしれない。でもそれはちょっとかわいそうな気もするんだよなあ』クームはそんなことを考えながらゲービーの家の中を歩き回りました。

「あーっ！」

クームは突然歩くのをやめて叫びました。

「もう、僕のばか。バカバカ」

クームの様子に気がついたゲービーがのんびりと言いました。

「どうしたんだいクームー？」

クームは大きくひとつ溜息を吐くと、

「僕ったら、ゲービーのお家と僕のお家をつなげてしまったよ」

「え～！いいじゃないかあ。外に出て入る手間が省けるよ」

「そ、そう？」

「うん、とってもいい具合だよ」

「そっか。じゃあ、いっかあ」

クームはちょっと不安がありましたが、まあよしとしました。

ゲービーはその後、少しだけ悩みましたが、結局、今までのように大声で歌うことにしました。クームはあんまりうるさいと容赦なく怒りました。けんかになってお互いの家から離れたりもしましたが、しまいには同じタイミングで二匹とも同じ場所に戻ってくるのでした。

山の麓のあなぐらで暮らしているでばねずみのゲービーと、あなぐまのクームは、隣同士。最初は別々に住んでいましたが、今ではほとんど一緒に住んでいるも同然です。二匹は無事に次の冬眠の季節を迎えられるかなあ。